

国 語

1 科目構成

改 訂		現 行	
科 目 名	標準単位数	科 目 名	標準単位数
国語表現Ⅰ	2	国 語 Ⅰ	4
国語表現Ⅱ	2	国 語 Ⅱ	4
国語総合	4	国語表現	2
現代文	4	現代文	4
古 典	4	現代語	2
古典講読	2	古 典 Ⅰ	3
		古 典 Ⅱ	3
		古 典 講 読	2

現行では、「国語Ⅰ」1科目のみを必修科目としているが、今回の改訂においては、生徒の実態に応じた一層適切な教育課程が編成できるよう、「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目を必修科目として設定し、そのいずれかを選択的に履修することとされている。

2 改訂の基本方針

この度の改訂に当たっては、「中学校までに培われた言語能力をさらに総合的に発展させるとともに、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた指導を一層充実して、社会人として必要とされる言語能力の基礎を確実に育成するため、科目の再構成を行い、選択履修が一層柔軟に行われるようにする。また、各科目においては、例えば、適切な情報を活用しつつ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことに関する学習が行われるよう、言語活動例を示すなどの工夫を行う。」という、教育課程審議会答申に示された基本的な考え方に立ち、教科・科目の目標について、次のような視点を重視して改善が図られている。

- (1) 互いの立場や考えを尊重して、言葉で伝え合う力を育成すること。
- (2) 社会人として必要とされる言語能力を確実に育成すること。

特に、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面に応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てること。

- (3) 文学的な文章の読解に偏らず、様々な文章を読んだり、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てたりすること。

3 改訂の内容

- (1) 目 標

国語科の目標は、次のとおり示されている。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

この目標は、現行学習指導要領の目標である①表現と理解の能力を育成すること、②思考力を伸ばし心情を豊かにすること、③言語感覚を磨くこと、④言語文化に対する関心を深めること、さらに、⑤国語を尊重してその向上を図る態度を育てること、の5点を継承しつつ、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図ることなどを踏まえ、「伝え合う力を高める」ことを新たに目標に位置付けて、示されている。

また、今回の改訂では、小・中学校と一体的に改善を行い、各科目の指導事項を全体として精選して示し、指導の重点化を図るとともに、一層柔軟な選択履修ができるようにしている。主な改訂点は、次のとおりである。

○ 領域構成の変更及び言語活動例の提示

改訂の基本方針の(2)を踏まえ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの指導が意図的・計画的に行われるようにするため、小・中・高等学校を通じて、領域構成を現行の「A表現」、「B理解」及び〔言語事項〕の2領域1事項から、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」、〔言語事項〕の3領域1事項に改められている。

また、領域ごとの指導内容と実際の言語活動との密接な関連を図り、生徒の主体的な学習活動の効果を高めるため、それぞれの領域にふさわしい言語活動例が各科目において示されている。

○ 指導時数の目安の提示

文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった従来の指導の在り方を改め、各領域の学習が調和的に進められるようにするため、「国語総合」において、話すこと・聞くことを主とする指導及び書くことを主とする指導に配当する授業時数がそれぞれ示されている。

○ 教材

教材については、生徒の心身の発達段階を考慮して、各領域にふさわしいものを調和的に取り上げ、文学的な文章に偏らないようにするため、「国語総合」及び「現代文」では、様々な種類の文章を取り上げることとしている。また、広く我が国の言語文化に親しみ、ものの見方や考え方を豊かにするような教材を取り上げることとされている。

○ 古典の指導

我が国における古典の価値及びそれを学習することの重要性を踏まえ、「古典」及び「古典講読」において、訓詁注釈に偏ることなく、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することを一層重視することとされている。

(2) 各科目

〈国語表現Ⅰ〉

ア 目標

国語で適切に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

「国語表現Ⅰ」は、現行「国語表現」と「現代語」の内容を再構成して新たに設けられた科目である。「国語総合」とともに選択必修科目の一つである。

「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域を中心として内容を構成し、社会生活に生かすことのできる言語能力を育成することを目指す科目であり、自分の考えをもち、論理的に意見を述べたり、相手の立場や考えを尊重して話し合ったりする態度や能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力の育成を重視することとされている。また、国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ちなどを理解するとともに、古典の表現法や語句・語彙などについても関連的に学習を行うこととされている。

言語活動例としては、「ア 自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うこと。」、「イ 観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。」、「ウ 相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などのための話をしたり文章を書いたりすること。」、「エ 身近にある様々な表現を集めその効果などについて考えたり、生徒の表現活動について自己評価や相互評価を行ったりすること。」が挙げられている。

教材については、論理的思考力を伸ばす学習活動や歴史的、国際的な視野から現代の国語を考える学習活動に役立つものを取り上げることに加えて、情報を活用して表現する学習活動に役立つものを取り上げることとされている。また、漢字については、常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようにするよう留意することとされている。

〈国語表現Ⅱ〉

ア 目標

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

「国語表現Ⅰ」の内容を高めた選択科目であり、表現力を一層高めることを目指している。アの目標に基づき、「国語表現Ⅰ」の内容に示す事項について指導する科目とされているが、生徒の実態等に応じて、話すこと・聞くこと、又は書くことのいずれかに重点を置いて指導することができることとされている。

〈国語総合〉

ア 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国

語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

現行「国語Ⅰ」の内容を改善した科目である。「国語表現Ⅰ」とともに選択必修修科目の一つである。

小・中学校国語を全面的に受け、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習を調和的に行い、総合的な言語能力を養うことを目指す科目であり、領域ごとに指導事項を示すとともに、領域ごとの指導時数の目安を示すこととし、話すこと・聞くことを主とする指導に15単位時間程度、書くことを主とする指導に30単位時間程度を配当し、計画的に指導を行うこととされている。

読むことの指導のうち、古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めることとされている。また、古典における古文と漢文との割合は一方に偏らないようにすることとされている。

言語活動例としては、「話すこと・聞くこと」の領域では、「(ア) 話題を選んで、スピーチや説明などを行うこと。」、「(イ) 情報を収集し活用して、報告や発表などを行うこと。」、「(ウ) 課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行うこと。」が挙げられている。「書くこと」の領域では、「(ア) 題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書くこと。」、「(イ) 相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知などを書くこと。」、「(ウ) 本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること。」が挙げられている。また、「読むこと」の領域では、「(ア) 文章に表れたものの見方や考え方などを読み取り、それらについて話し合うこと。」、「(イ) 考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べること。」、「(ウ) 課題に応じて必要な情報を読み取り、まとめて発表すること。」が挙げられている。

教材については、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むこと的能力が偏りなく養われるよう調和的に取り上げることや言語活動が十分行われるよう選定することとされている。その際の観点としては、今回の改善の趣旨を一層生かすようにするため、従前に加えて、「日常の言葉遣いなど言語生活に関心をもち、伝え合う力を高めるのに役立つこと。」という項目が追加されている。

〈現代文〉

ア 目 標

近代以降の様々な文章を読む能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで表現し読書することによって人生を豊かにする態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

現行「現代文」の内容を改善した科目である。読むことを主とする科目であるが、話すこと・聞くこと及び書くことの言語活動も効果的に取り入れて、読むこと的能力や進んで表現する能力、読書に親しむ態度の育成を図ることを目指している。

言語活動例としては、「ア 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。」、「イ 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。」、「ウ 文章の理解を深め、興味・関心を

広げるために、関連する文章を読んだり創作的な活動を行ったりすること。」、
「エ 自分で設定した課題を探究し、その成果を発表したり報告書などにまとめたり
すること。」が挙げられている。

教材としては、近代以降の様々な種類の文章とされており、その際、文学作品や論
説文等だけでなく、現代の社会生活で必要となる実用的な文章も取り上げることとさ
れている。

〈古典〉

ア 目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方
を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

現行「古典Ⅰ」及び「古典Ⅱ」の内容を再構成した科目である。「現代文」と同じ
ように、話すこと・聞くこと及び書くことの言語活動を効果的に取り入れて、読むこ
との能力や古典に親しむ態度の育成などを目指す科目であり、古文及び漢文の両方
を取り上げ、一方に偏らないようにすることとされている。

言語活動例としては、「ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読、
暗唱をすること。」、「イ 国語の変遷などについて関心を深めるため、辞書などを用
いて古典の言葉と現代の言葉とを比較対照すること。」、「ウ 古典に表れた思想や感
情の特徴、表現上の特色などについて話し合うこと。」、「エ 古典を読んで関心をも
ったことなどについて調べ、文章にまとめること。」が挙げられている。

教材は、様々な文章や作品等について、親しみやすく基本的なものをできるだけ精
選して取り上げるとともに、日本漢文も含めるようにすることとされている。

〈古典講読〉

ア 目標

古典としての古文と漢文を読むことによって、我が国の文化と伝統に対する関心を
深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

イ 内容の構成と取扱い

現行「古典講読」の内容を改善した科目である。生涯学習に生きる古典学習を進め
る観点から、古典に触れる楽しさを味わうことを一層重視し、詳細な読み取りの指導
に偏らないよう配慮することとされている。

また、古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができることについて
は、現行と同様である。

言語活動例としては、「ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読を
すること。」、「イ 古典に表れた思想や感情などについて、感じたことや考えたこと
を文章にまとめたり発表したりすること。」、「ウ 古典を読んで、関連する文章や作
品を調べたり読み比べたりすること。」が挙げられている。

教材は、特定の文章や作品等について、まとまりのあるものを中心として適切に取り
上げるようにすることとされており、また、今回の改訂からは、古典の現代語訳な
どを適切な範囲で関連的に取り上げることができるとされている。

4 質疑応答

問1 国語科の必修科目を設定する上で、どのような点に配慮することが大切か。

今回、国語科は、6科目から構成されることとなったが、このうち、必修については、他の教科とともに選択必修となり、「国語表現Ⅰ」（標準単位数2）と「国語総合」（標準単位数4）のうちいずれかを選択することとなった。

各学校において、必修科目を「国語表現Ⅰ」とするのか「国語総合」とするのかについては、国語科の教育課程全体を考慮の上、決定する必要がある、その学校において基礎・基本としてどのような言語能力を育てようとしているのかという明確な方針を持つことが前提となる。

また、このことは、その学校で、国語科の教育課程をどのようにバラエティー豊かなものにしていくかということと関連しており、必修科目を選択することと併せて、科目数や科目の組合せなどについて検討することが重要である。

問2 今回の改訂における古典に関する指導の取扱いはどのようにになっているのか。

古典に関する指導については、「我が国の文化と伝統を尊重し、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成を重視する」という、改善の基本方針を受け、古典に親しむ指導を進めることが、従前以上に強調されている。

そのためには、訓詁注釈や古典文法指導に偏ることなく、音読や朗読、発表など、各領域の言語活動を通して、古典に親しむ態度を育成することが大切である。

例えば、「古典講読」では、古典の原文の指導と関連させて、古典の現代語訳などを取り上げることができることとなったことも踏まえて、教材の開発や指導方法の改善などを進めることが望まれる。

また、古典を読んで興味をもったことなどについて調べる学習など、生徒の興味や関心を広げるような古典学習を進めることも大切である。

問3 各科目にわたる内容の取扱いの特色はどのような点にあるのか。

現行の学習指導要領では、指導計画の作成に当たっては、「国語Ⅱ」、「現代文」、「古典Ⅰ」、「古典Ⅱ」及び「古典講読」は「国語Ⅰ」を履修した後に履修させるものとされているが、今回の改訂では、履修順序に関する規定は行われていない。

また、教材については、各科目ごとに示されているが、「国語総合」及び「古典」においては、教材選定に際し配慮すべき観点や項目を立ててまとめて示されており、「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」及び「現代文」は「国語総合」で示されている事項、「古典講読」については「古典」で示されている事項に留意することとされている。

さらに、学校図書館を計画的に利用することを通して、読書意欲を喚起し読書力を高めることなどが示されている。